

親子の絆

校長 田中 準三

子供たちの元気な声が学校に戻ってきました。新しい年、そして私にとっては教員生活最後の年がスタートしました。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。春の日差しが心地よい今日この頃、桜も順調に開花しています。春はなにか心がウキウキするのは私だけでしょうか？ ただ、今年はちょっとつらい春でもあります。それは、消費増税です。景気の好転の実感が伴わない（私個人の感覚ですが）中での増税は本当に痛いです。そういえば先月末、我が家の台所にビール（正確には第三のビールですが）のカートンが5箱も並んでいました。妻の自衛手段ですが、儂い抵抗のような気もします。＜笑＞

母は、叱ったあとに必ずこのように言います。

「他人から見て『この子はねえ・・・』と思われぬように叱っているんだよ！ 他人はほとんど叱ってくれないでしょ！ だから思ったことを、良いことなら良い、悪いことは悪いとはっきり言うことが大切だと思う。叱っているのは、もっともつといい子になってほしいからなんだよ。」

「みんな20歳から大人になるとか言うけど、あなたが何歳になろうとも、わたしの子供！ だから悪いと思ったことは、はっきり言うから。」

これはある書物に掲載された13歳の女の子の文を一部手直ししたものです。3月に49名の卒業生を送り出しましたが、そのはなむけの言葉の中で私は、親子の絆を強めてほしいという願ひを話しました。また、絆は甘やかしではなく叱咤（しった）や激励などを通して強まるものであるとも話しました。この文を書いた女の子は自分が叱られることを肯定的にとらえ、それが母の愛情であることをしっかりと理解しています。最近、親が子供を叱らなくなるとよく耳にします。もちろん子供の思いや願ひを認め、それに応える親の姿は素晴らしいものです。しかし、それが子供に迎合し、子供を安易な方向に進ませることになっては本末転倒です。それが良いかどうかは別ですが、今は亡き私の父は厳格で、叱られた時によく正座をさせられました。子供の頃はそれが理解できず父への反感が募りましたが、今になってそれが「親心」であったことに気づかされます。親子の絆は親子の緊密なコミュニケーションによってお互いの想いを理解して初めて強まるものです。その意味では私自身の親子の絆はあまり強くはなかったかもしれません。子供の頃の父は、ただ怖い存在で、先の文章をかいた女の子のように叱られることを理解していたわけではありませんから……………。

みなさんはお子様とよくお話をされていますか？ 話し合うことなくして良いコミュニケーションを築くことはできません。新学期のスタートはひとつのきっかけだと思います。お子様自身がこれからの1年をどう過ごしたいのかなど、本音で語り合える機会をぜひ設けてほしいです。

